
異説 とある魔術の禁書目録 式

シェン・マクダウェル・タオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説 とある魔術の禁書目録 弐

【ZPDF】

Z0806X

【作者名】

ジョン・マクダウェル・タオ

【あらすじ】

器物損壊事件の犯人を見つける為に「犯人は現場に戻ると言つて言葉を信じて現場である第10学区の廃墟「ストレンジ」にやつて来た夜尋と緒層羽だつたがそこでスキルアウトの襲撃にあい・・・?

昔のお言葉に「犯人は現場に戻る」という言葉がある。
「だから、現場にいつてみましょ」

彼の後輩がそんなことを言つて歩きだしてからかれこれ一時間ほどで現場に到着した
場所は第10学区のストレンジと呼ばれるスラムのような地域。
様々な廃棄物や崩れたビルが所狭しと並び、スキルアウトの根城にもなっている場所だ。

「いやー、実際来てみると第10学区の酷さがわかりますね周りどこ見ても瓦礫と廃ビルしかないです」

「まあここに住んでる人たちもいるわけだし、あんまりそつゆうこと言つのは良くないぞ」

「テコピンで失礼発言をした緒堵羽に制裁を加える夜尋。

あう、と悲鳴をあげながら一步後退する緒堵羽は抗議しようと声をあげかけたが、やめた。

それは、夜尋のテコピンが以前よりかなり威力がなかつたためである。

いつも彼ならテコピンする際に勢いをつけて思いつきり吹き飛ばすのに今回はそれがなかつた。

彼が制裁に力を入れない時は、何かを思い出している時だと、緒堵羽は長年の付き合いから理解していた。

暫く、周辺を偵察しようとした矢先、何かが足元に飛来した。

ヒュンッと風を切り裂く音と地面に何かが刺さる音は同時だった。
瞬時に思考を切り替え、夜尋は緒堵羽の手を引き瓦礫の影に飛び込む。

同時に数秒前まで自身の足があつた所にもう一発何かが飛来する。

緒堵羽が目を閉じ、自身の能力でそれを引き寄せる。

「これは、ボウガンの矢ですね」

「なら、狙撃手はそこまで離れていないな、恐らくどこかの一階辺りに潜んでいるだろ?」

周囲を確認する夜尋。

二階が残っているビルは近くに一棟しかなかった。
しかし、いつの間に出てきたのか辺りは数人のスキルアウト達に包囲されていた。

「叶谷」

夜尋が短く後輩の名前を呼び目線で会話をを行う。

任せた、と。

緒堵羽がそれに頷くのを確認すると夜尋は後方 狙撃手のいるビルへ駆けていく。

それを阻もうと一人のスキルアウトがそれぞれの武器 鉄の棒、トンファー を持つて彼に襲いかかるが、何を思ったかお互いの武器でお互いを攻撃しあつて気絶した。

突然の事に目を白黒させる他のスキルアウト達。

夜尋の動きが素早すぎてお互いが攻撃を外しあつた訳ではなく、緒堵羽が仕掛けた攻撃で彼らはお互いを攻撃しあつた。

遠くの物体を操作する能力、念動力。

学園都市内で最もポピュラーな能力ではあるが、使い方次第で凶悪な能力となる。

最初に接触してきた女子に足を引っ掛け転ばせ、続いて来た二人を念動力で互いを抱き寄せる形で固定し転がせる。

他の三人を六つの手錠を飛ばし、手足を拘束して無力化した。

残った三人は圧倒的な力の差を見せつけられ、逃げ出そうとしたがそれを許すほど緒堵羽は優しくなかつた。

手錠を足に飛ばして両足を拘束しそれにつけてあつた拘束用のロープで三人を更に縛り上げた。

他の気絶しているスキルアウトを手錠で繋ぐと、緒堵羽は急いで彼の後を追つた。

瓦礫の山から成る廃墟を夜尋は駆ける。

先程から何度かボウガンによる狙撃を受けたが瓦礫の影に隠れながら辛くも難を逃れていた。

肩で息をしながらも目的地のビル前までたどり着いた夜尋だったが

「ここもかよっ」

予期していなかつた訳ではないが、スキルアウトの面々が姿を表す。緒堵羽の所より数は少ないが、銃を持っている奴がちらほら見受けられた。

すぐさま、発砲されるがそれは夜尋に届かなかつた。
壁によつて銃弾は遮られていた。

一瞬、何故こんな壁がと考えようとしたがすぐに壁の向こうに回つて銃弾を浴びせようする。

彼らが走る速度も決して遅くはなかつたが、夜尋が反撃する準備を整えるには十分だつた。

夜尋を撃ち殺さんと回り込んだスキルアウト達の足元が持ち上がる。それに動じたが最後。

それぞれの鳩尾に拳と蹴りを叩き込む夜尋。

他の武器をもつたメンバーも一武器を別のものへと作り替えて使えなくした。…………

分子、と言つものがある。

二つ以上の原子が電荷的に中性的な物質で、同種あるいは異なる原子が科学結合により結び付いて分子となる。

この世に存在する全ての物質は原子が集まつたいわば分子の集合体。夜尋の能力は、自身が触れた物の分子が形成している情報を掌握し自身が想像した物に分子の情報を固定し書き換える力、創作直しクリエイティブコレクト。能力の強度は一大能力者（Level 4）

超能力者（Level 5）ではないのは直接触れないと効果を発揮できない為と夜尋の精神的問題があるための事だ。

急ぎ、階段を上がって二階までたどり着く。

狙撃手は夜尋に気がつくがボウガンに矢を装填している間に距離を詰め、得物を蹴り飛ばす。

ガツと腕を武器」と蹴り飛ばされ、踞るスキルアウトの一員。どうやら女性のようだ。

そこへ、かけ上がつてくる音が聞こえ、振り向き身構える夜尋。だが、すぐに警戒を解いたのは上ってきた相手が風紀委員の後輩だったからだ。

「センパイ、ご無事、ですよね」

「ああ、なんとかな。さて」と

夜尋は先程の狙撃手の前まで歩いて行き、目の前に座り込んだ。

「さて、話を聞かせて貰おうか

「てめえらに話すことなんざ最初ハナからねえつす」

女スキルアウトはこちらの用件など知ったことではないとそっぽを

向いてしまった。

「まあまあ、質問聞いてみてからでも遅くないんでない？」
「……………」

かなりの間に少しだけ戸惑つた夜尋と緒堵羽だつたが聞いてくれる
といふ意思を確認して質問を投げ掛けることにした。

「最近、この付近に出没してるロボットやら壁やら人の体やらを何
らかの能力で焼き切る人を探してるんです、知りま、あやつ！？」

せんかと続けよつとした緒堵羽の言葉を途中で遮つて、立ち上がる
狙撃手。

その顔からは血の氣が失せ、青ざめていた。

「あんたら、あの怪物何とかしてくれるっすか！？」

と、彼女はそれまでだるそうにしていた態度から一変し血相を変え
て掴みかかる勢いで聞いてくる。
(実際に夜尋が掴みかかれているのだが)

「……落ち着けって。先ずはあなたの名前から教えてくれないか
？」

女性は赤井 要非あかい ょうひと言い、スキルアウト所属は天龍スカイアーラゴンだと言った。

要非の話によれば、スキルアウト狩り(仮名)は三年ほど前から出
没し始めたらしい。
そいつはその時に起こつた事件の関係者を片つ端から探しだし、制

裁を加えているのだとか。

容姿やどこの学校かは彼女も他のメンバーも知らないと言つことで、
その日はお互いの連絡先を交換してお開きとなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806x/>

異説とある魔術の禁書目録 式

2011年10月9日15時54分発行